

ヤンゴン素描

2. 三角の町サンチャウン

山形洋一

チーミンダイン (Kyimindain) 駅のアーチを東にくぐると、思わず目を疑う。レンガ造りのいかつい駅舎の表玄関にはしてはあまりに狭く、路地やドブに囲まれた裏長屋を、うっそうとした木立が囲み、およそ駅前らしくない。日が暮れば街灯も暗く、僧院の塀の向こうで鳴く犬の声が不気味だ。植民地時代、このあたりにビルマ人墓地があったと、古い地図には記されている。

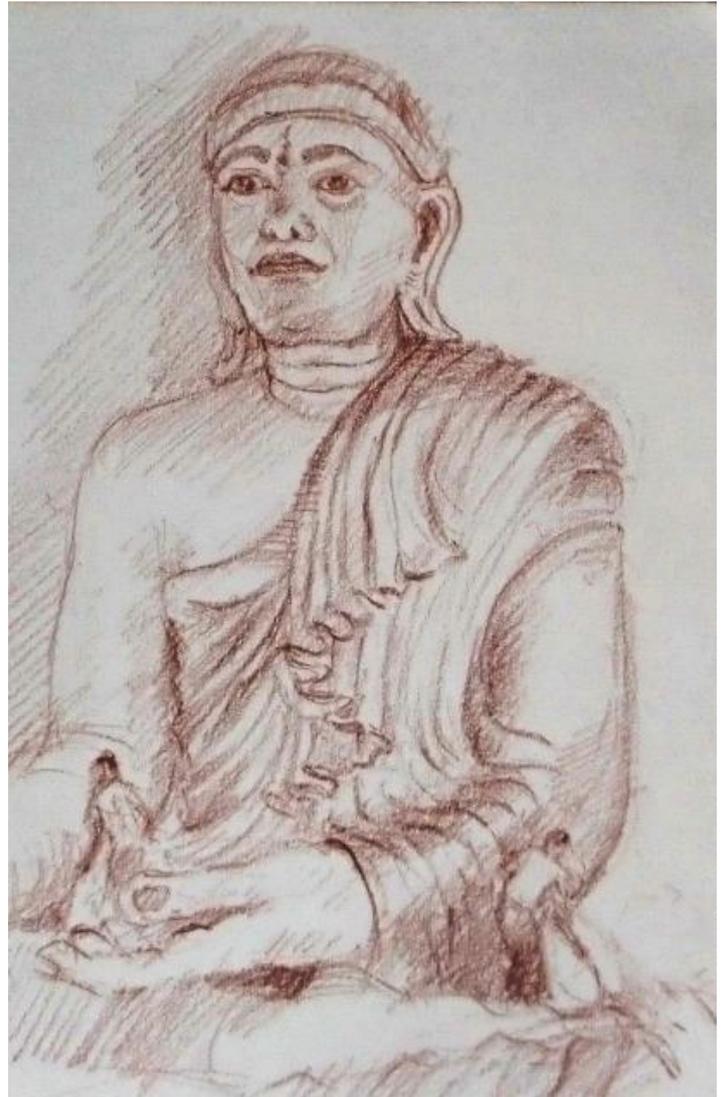
ここでも東西に細長い短冊型の街区が並んではいるが、衛星画像を拡大すればわかるように、短冊の位置が途中でずれていることが多く、見通しも、風通しも悪い。日本の城下町によくある、外敵の直進を阻む仕掛けのようにも見えるが、それにしては中途半端だ。

南北に長いバホ道路 (Baho Road、中央道路) もその名に似ず、こそこそと曲がっている。北から鉄道の東に沿って南下したかと思うと、駅東口の手前で左に折れ、さらに右に折れて、駅を遠巻きにしているのだ。

西の港にあわせて作られた駅なのに、駅舎を東口に置いたのも不思議だ。港町で起こる反乱や暴動に対して、駅の東に鎮圧部隊を駐屯させる意図があったのではないか。ここに立つとき感じる閉塞感が、そんな想像を掻き立てる。

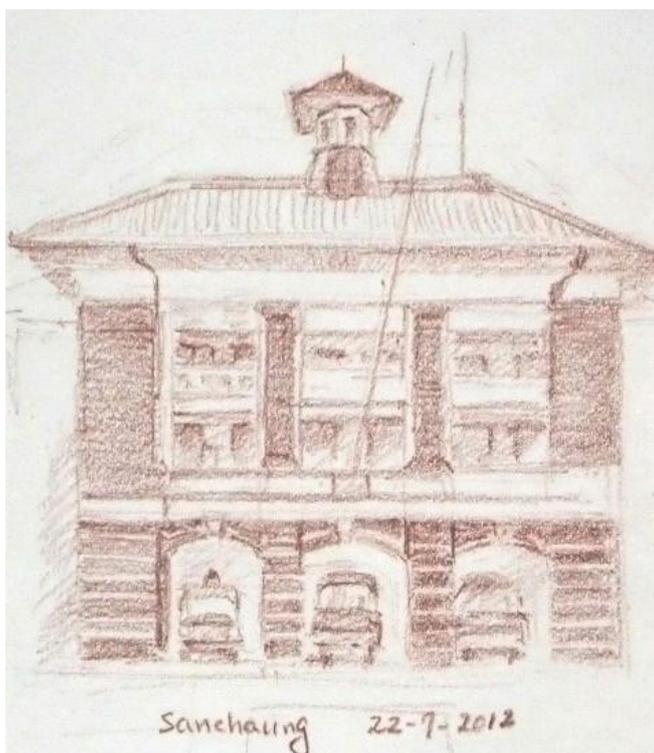
駅の南を東西に延びるバーガヤー通りは広々としている。通りの南にある寺は、Googleマップでも目立つ大きなほぼ正方形の屋根の下に、白塗りの大きな仏座像が安置されてある。7月の祭りの前には、縄梯子をかけて掃除をしていた。

バーガヤー通りも商店が少なく、それと直交するバホ通りも、これまた不気味なほどさびれている。かつてこのあたりはシャン族の村に指定され、イギリス将校のたしなみであったポロ競技に必要な、高地育ちのポニーの交易で栄えた時期があったらしい。中国大使館に近い鉄道の駅は今でも「シャン・ラーン」と呼ばれている。



バーガヤー通りも東に進み、南北に走るピー (Pyay) 大街道にぶつかりあたりから、急ににぎやかになる。シティーマートやダゴンセンターII のような新しい建物の周りを埋め尽くしているのは、ブリジストン、ミシュラン、グッディヤー、ヨコハマなどの看板を掲げたタイヤ取扱店である。細めの道に入ると、タイヤ、カーエアコン関連の店が多い。店主の多くはインド・パキスタン系だが、英領時代、このあたりにヒンドゥー教徒の「埋葬地」があったことと関係がありそうだ。

路上市場の売り子の中にも、インド系の顔が多く交じっている。周辺を見まわすと、金色に塗られたインドボダイジュの木の根元にシバ神の三つ又鉾 (Trisul) があり、その裏にカーリー女神の寺があつたりする。路地の奥の僧院ではブダガヤ (釈迦が悟りを開いた所) の大塔を模した、インド式仏塔の建設が進んでいる。かと思ふと。路地の反対側には、旗竿のてっぺんから引っ張った本のロープに 7 枚ずつ濃い緑と朱色の旗が結ばれ、アラビア文字でアリヤハッサンの名があり、シーア派ムスリムのものらしい。



インド系の人には血液型 Rh マイナスが比較的多いそうで、国立血液センターでは毎年、インド・パキスタン・バングラデシュ系の自動車部品・修理関係者からの献血を募っている。このあたりからも来ているのだろう。

地図で見るとサンチャウンの町は、一本の鉄道と二本の大通りで区切られた、きれいな三角形にまとまっているが、その中にはインド系やシャン族や鉄道員その他、さまざまな人が同居していて、まるでサモサの角ごとに、味の違う具を詰め込んだような格好だ。比較的早くから開けた割には、その後の開発が遅れたようで、学校や消防車などに古い建物が見られる。

サンチャウン町を代表する「サンチャウン通り」が地図に載っていることに、しばらく気付かずにいた。太くてまっすぐなバーガヤー道路のすぐ南に隠れ、ゆるやかにカーブしているせいもあって、地図では目立たないが、歩いて見ると、人も車もサイカーも、好んでこの道に群れてくるので、いつも混んでいる。店の装いも華やかで、ブランド物こそないが、服が洒落て、パンや果物がうまそうだ。とくに夜店の賑わいが楽しい。

通りの途中ほどから、ミン、ミンモー、ナンダウンの順に三つの小路が分かれて西南西に向かう。朝市でにぎわうこれらの小路が、いずれもゆるやかに右カーブしているのは、なだらかな丘の裾に等高線を描くように設計されたからだろう。丘の裾は急に切れ、谷筋を西にむかって下水が流れている。地図にも載っていないので名前がわからないが、これこそこの地域の名前のもとになった、清水（サン）の小川（チャウン）であるらしい。今では家庭排水で、見る影も無く汚れている。

ドブ川を南に渡るとシンソーブー道路、すなわちサンチャウン町の三角形の南西の辺にあたる。つまりアジア・ローヤル病院の角から、シャン（バホ）道路を越えると、舗装がなくなり、ウ・ルニ通りと名前を変えて、とたんにみすぼらしくなる。鉄道のガードをくぐればアロン町で、このあたりは北にはシャン族、南にはカレン族と、キリスト教ミッションによる少数民族教化の施設が多かった。USAIDの息のかかったNGOであるPSIは、この辺にも特約店に「サン診療所」や「サン薬局」の看板を掛けさせている。

今は使われていない鉄道の引き込み線乗り越え、通りは消え、下水の縁を歩くことになる。昔の清川が、汚れ汚れてここまで来ているのだ。振り返るとレンガ造りのアーチが下水をまたいでいる。セーナ川の橋桁を小さくしたような古風な作りがなつかしい。科学技術につきものの思い上がったいかつさと、自然に従う機能美が奇妙に交じり、懐かしいような、おぞましいような気分させられる。

その気分につきあって、ちょっと腰をすえ、スケッチしていると、いろんな人がわきを通る。経済的には中の下から、下の上といった



ところだろう。そうみすぼらしいなりをしているわけでもなく、ぎすぎすした感じもない。いたってのんびりしたものだ。

コンテを走らせながら、「レ・ミゼラブル」のあるシーンを思いだしていた。傷ついたマリウスを担いで、ジャン・バルジャンが下水伝いにパリを脱出するシーンである。

すると、なんとという偶然、アーチの向こうから鼻歌が聞こえてきたではないか。その声の明るさから少年ガブローシュを期待したが、姿を見せたのはやや年かきな青年で、肩に大きな袋を担いでいた。下水の底から、金になりそうなおみを漁っているのだ。

痛ましい生きざまではあるが、本人は昂然として、歌声は途切れない。私はちょっと愉快になった。ひねくれているかもしれないが、あまりに古典的な「貧困」の風景に、うれしくなってしまったのである。

(ヤンゴン、2012年10月7日)